

合気道授業における快感情と主観的体力との因果関係の検討

○園部 豊・平山浩輔・原田 長・山田 亮・泉 敏郎 (帝京平成大学)

キーワード: 交差遅延効果モデル, 同時効果モデル, 健康教育

目的

これまで大学体育授業での合気道が、大学生の快感情や主観的体力を改善させる可能性があること(園部ら, 2009)が示されている。しかし、両変数間の因果関係性までは不明である。これが明らかとなれば、合気道による健康教育の指導法確立に有用な資料となる。

そこで本研究では、2 時点の縦断調査をもとに、合気道授業における快感情と主観的体力との因果関係を検討することを目的とした。

方法

1. 調査対象

首都圏 A 大学にて 2009 年から 2011 年に大学体育授業で合気道を受講した男性 155 名(平均 18.44±0.52 歳)であった。

2. 測定指標

(1) 快感情

授業における快感情(快 - 不快)を評価するために、Feeling Scale を用いた。-5 点(非常に悪い)から+5 点(非常によい)までの得点幅で評価を行わせた。

(2) 主観的体力

授業における主観的な体力レベルを評価するために、主観的体力評価表を用いた。1 点(低い)から 5 点(高い)までの得点幅で評価を行わせた。

3. 手続き

半期 15 回授業の内、ガイダンスおよび教室講義を除く合気道において、授業後に集合調査法を用いた質問紙調査を行った。調査時期は、第 1 回目の調査時点(以下 Time 1: 授業 3 回目に相当)、第 2 回目の調査時点(以下 Time 2: 授業 14 回目に相当)として、調査を行った。

4. 分析方法

構造方程式モデリングによりモデルの検証を行い、変数間の因果関係を表す交差遅延効果および同時効果について検討した。

5. 倫理的配慮

対象者には調査目的および調査内容を説明した。調査への協力は自由意志であり、中断も可能であること、授業の成績評価とは無関係であること、追跡のために学籍番号の記入が必要となるが、統計処理を行うため個人の結果として公表されないことを説明書および口頭にて説明し、回答を依頼した。

結果

各適合度指標の値は交差遅延効果モデル、同時効果モデルともほぼ許容範囲とし、両モデルとも変数間の因果関係を解釈できると考えた。

交差遅延モデル (Figure1) では、同一変数間の標準化推定値はいずれも有意な正の関連であったが、「快感情から主観的

体力」「主観的体力から快感情」には有意な関連は認められなかった。同時効果モデル (Figure2) では、同一変数間の標準化推定値はいずれも有意な正の関連であり、また Time2 における「快感情から主観的体力」においても有意な正の関連が認められた。

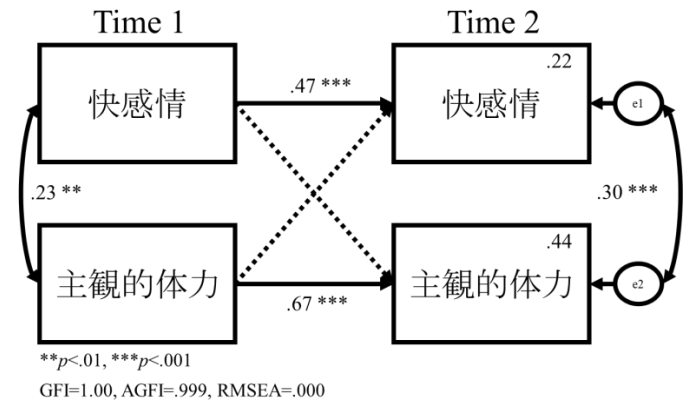


Figure 1 快感情と主観的体力の交差遅延効果モデル

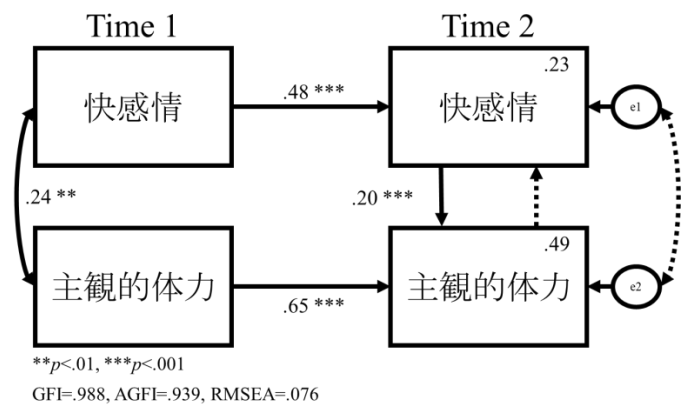


Figure 2 快感情と主観的体力の同時効果モデル

考察

交差遅延効果モデルでは同一変数間の影響のみが認められたこと、同時効果モデルでは同時的にも快感情から主観的体力に影響する因果関係であることが明らかとなった。この因果関係において、合気道による快感情の享受が起点となり、合気道への動機づけや授業中の活動量の増強により、体力の向上を認識した可能性が考えられる。

利益相反開示

本研究では、開示すべき利益相反関係にある企業などはありません。

(SONOBE Yutaka, HIRAYAMA Kosuke, HARADA Takeru, YAMADA Ryo, IZUMI Toshiro)